

女性技術者として今おもうこと

土木地質 宮田 寿美子

私が、今の会社に入社しようと決めたきっかけは、「QJ（求人情報誌）」でした。あの頃、それまで目指していた教職の道をあきらめて、一般企業へ就職しようと、自分の興味ある会社をさがしていたとき、“年3回の賞与支給！隔週休2日制（当時）”と当社欄に書いてあったのを覚えていました。これは、魅力でした。

就職先としては、出身が教育大の理科で「地質」をやってきたので、その系統の会社を希望してはいましたが、自分が、技術職として働けるとは思いもよりませんでした。「地質」は好きだけれど、それで稼げる自信なんてなかったのです。それでも入社面接の時、仕事内容等いろいろと話を聞いているうちに「やはり、技術の方をやっていけたら、やりがいがあって素晴らしいだろうなあ。迷惑をかけるかもしれないけれどやってみたいなあ。」という気持ちが強くなり、幸運にもその部署で雇っていただくことに決まったのでした。今から10年も前のことです。

最近では、道路での誘導や工事現場等でも女性が働いているのを当たり前のように見かけるようになりましたが、私が入社したての頃は、そういった女性は珍しい存在でした。当然この業界でも同じでした。

だから、私も当時の上司に「女性の技術職は会社でも初めてだから正直言ってどう接していいかとまどっている。でも、力仕事とか物理面は別にして、男と同じように接するからな。」と告げられ、その言葉通りにビシビシと厳しいご指導をうける毎日が始まったのでした。中には私が女ということで特別扱いをする（少なくとも私にそう感じられた）人もいましたが、直属の上司がそうで

はなかったことが、精神的に救われました。当時は、コアチェックから報告書の前半を書くこと等内業が主な仕事でした。その頃同世代の男の人達は、毎日・現場で内心、うらやましかった。そのうち、自分も現場に行く機会がだんだんと多くなり、やがて自分が担当した現場の報告書を書くようになりましたが、初めて書き上げたときの喜び・充実感は今でも忘れられません。これはおそらく大勢の人が経験した想いでしょう。

女といえば結婚や出産を機に退職なさる方も多くいます。私の知り合いでは、旦那様が県外という理由で辞めた方が何人かいますが、その中の一人は地質が大好きで休日といえば地質巡検や団体研究会等に積極的に参加していた人、また元請け業者の方で「緑地公園を設計するのが夢なの。」と切々に語っていた方が、その1年後に辞めてしまった人などがいます。どちらも私には残念でなりません。でも、いろいろ悩まれた結果きつと幸せな選択だったのでしょう。

私の場合、結婚後も仕事を続けることができ、さらに現在までに2度程、産・育児休暇を戴いています。一人目を宿したときちょうど、育児休業法が施行されたばかりで私にとって幸運でした。それでも、業種に関係なく、いろいろなところで、特に中小企業では出産退職を余儀なくされる話を数多く聞いていたので、職場の誰からも何の嫌みもなく、育休が当然のように認められたこと、そして復職の際にも快く迎えられたことは、自分が実に恵まれた境遇にあると、同僚並びに上の方々には改めて感謝しています。

ただ、2度目の育休あけの復職は、私自身にとっては大変なことでした。子供が2人に増え、育児

量が増えたことや、会社の体勢も少しずつ変わり、その中でやっていけるのかという不安。一時は一般職あるいはパートへ転機しようかと考えたこともありました。「そんなことおまえに出来る分けないだろう。」相談した人達に言われ、第一自分でもよくわかっていることなのに…。結局、依然通りの仕事を続けてきましたが、振り返れば実際は大変だったのは、ほんの1年程度のことのように思えます。

私は、今までこの仕事をしてきた中で、自分の技術の少なさとかミスが多さ等に落ち込むことがあっても、仕事そのものがつらいと思ったことは決してありませんでした。どんなに忙しくても、ハードな仕事内容でも嫌になることはなかった。ただ、つらかったのは「女なのに…」「女だから…」の言葉に直面したときです。例えばこんな事がありました。まだ、地質調査技士の資格を取得していなかった頃、現場代理人として初回打ち合わせに臨んだとき、「この仕事を担当するのは構いませんが、資格をもっていないのなら「現場代理人」は「主任」が兼ねる形にして下さい。」と言われたことです。理に適った言葉ですが、当時調査技士を持っていなくても代理人になれた時代、「それは、お前が女だから遠回しに断われたのだろう。」と社に戻って言われたときはさすがに現実を目の当たりにした思いでした。また、内輪の話ですが、社内の人事異動のとき、新配属の上司に「女は、代理人に出せない。+α的存在ならいいが、頭数には入れられない。」とはっきり言われたこともありました。実は、この方には育休あけに相談に載っていただいたこともあり、「女」という言葉の中には、「母親なんだから不規則な仕事は大変だろう」という意味も含まれてはいたのです。けれど、露骨に面と向かって言われたのでつらいものがありました。結局そのときは、今後のことをお互いに話し合い理解し合って、その配属で落ち着いてたのですが、周りから、同情の言葉をかけられたり、「宮田さんのように、あまり気にしない性格だからこそ、あそこに居座れた。」

と言う人もいましたが、やはりこの仕事を続けたという思いが強かったから凌ぐことができたのだろうと思えます。どちらも、もう過去のお話です。

最近感じることは、女性というだけで不利な面があるということは、ある程度仕方のないことだと思うのです。また、甘えでしかないと思われるかもしれませんが、同じ職種であるからと言って、必ずしも女性が男性と平等ではあり得ないと思うし、必ずしもその必要はないのではないかと思うのです。例えば、以前このコーナーで応用地質(株)の岩部さんが書いていらっかった、横坑崩壊時の話は共感させられる素晴らしいエピソードだと感じました。また、女性・男性に係わらず、専門的な技術力がしっかり身に付いていればいいのであって、その点で、不利な面も少なくなるでしょう。しかしそうは思うけれども、私の場合は、残念ながら、年数は重ねたものの、向上心に欠けている上に、短気で呑気な性格も手伝って自分から不利な面を作りだしているのが現実のようです。

最後に、私が勤務する会社の社長は、常々「新しいことへの挑戦」をうたっておられる方ですが、実際、あの時代に女性の私を技術職へ迎えてくださったこと、法律上「猶予期間」とされている時期に、育休を認めて下さったこと等、私には感謝することが有り余るくらいです。また、これまで「女性」ということで周りの人達に“差別”とは違った意味で、支えられ、助けられてきたことも事実です。これからは、先輩達から得てきたものを、後輩達に私なりの形で返していけたらと思っています。

私は、会社内外を含め、家庭的な雰囲気この職場が好きだし、この仕事が好き。だから、これからもずっとここにいたいと思いながら過ごしている毎日です。